

Co-Creation “共想”フォーラム

～あんしんプラットフォーム構築に向けて～

11月16日に都内で、「Co-Creation “共想”フォーラム～あんしんプラットフォーム構築に向けて～」が開かれた[主催：セコム、日本経済新聞社クロスメディア営業局、協力：科学技術振興機構(サイエンスアゴラ)]。同フォーラムでは、“共想”によるオープンイノベーションをテーマにセコムによる講演が行われ、「まちづくり」をテーマに有識者がパネルディスカッションを行った。



“共想”について

サービス学では企業と顧客が相互作用しながら新しい価値をつくる「Co-Creation」を「共創」と訳し、ビジネス界でも協働による価値創造を共創と呼び始めている。こうした協働の視点をサービス事業のような継続ビジネスにあてはめ

た場合、長期間にわたるパートナーシップがより一層求められるため、協働にあたり共通する「想い」が重要になってくる。このためセコムグループでは、対話によるオープンイノベーションに「共想」の字を当て、社会との協働を推進している。

変わりゆく社会に、変わらぬ安心を ～未来への挑戦～

セコム社長 中山泰男氏



現代は「VUCA」の時代といわれる。変動(Volatility)、不確実(Uncertainty)、複雑(Complexity)、曖昧(Ambiguity)のイニシャルで、先行きが不透明な時代を意味する。しかし、私はこれを構想(Vision)、理解(Understanding)、明快(Clarify)、加速(Acceleration)と読み替えて、将来像を共有しよう。変化の特徴を理解しながら、混沌の中でも筋を通し、課題解決に向かうスピードある変革を実践していきたいからだ。

2000年に米ケルコム社が全球測位システム(GPS)と携帯電話の電波を使った位置情報特定技術を開発したとき、セコムは真先に技術契約を結び、独自技術を加えて01年に「ココセコム」という、子どもや高齢者を事件や事故から防ぐための端末を世に送り出した。屋外という新しい警備ニーズを実現するための「共想」といえるだろう。

ココセコムで被保護者を無事に保護できた第一号案件の報告を受けたとき、開発を担当した研究員は「やり遂げたときに涙を流せるような仕事をしたい」と思っていた。実際に世の中に役立つことができて、思わず目が熱くなったと話している。これはまさに、セコムグ

ループ全社の「想い」を代弁している。社会に届けたい安全・安心を実現するために、各事業の強みを掛け合わせ、社会システムとして展開する「社会システム産業」の構築を目指す中、より明確な羅針盤として、同じ「共想」を今年5月に策定した。共想パートナーとしても、安心を提供する社会インフラ「あんしんプラットフォーム」を通じて、①いつどこでも、あんしん②誰にでも、あんしん③切れ目なく、ずっと、あんしん④という3つの特徴あるサービスを創出すること、想定外の事態の発生を想定内にしていき、社会の流れ、生活の流れを止めないよう、社会の生産性(レジリエンス)を高めていく。

「共想」について

「共想」が重要で、その柱となるのが、「セコムグループ2030年ビジョン」である。

最後に、「未来を予測する最良の方法は、未来を自らつくることだ」(ピーター・ドラッカー)という言葉も、皆さんと共有していきたい。

セコムオープンラボで進む「共想」 ～一周年特別回アイデアプレゼンテーション～

セコムオープンラボ総合ファシリテーター 東京理科大学 総合研究院 客員准教授

沙魚川 久史氏



取るが、2・0は企業や団体に属する個人と個人が集合し、議論の交差点で新しい何かを生み出していく。セコムオープンラボは、そうした「対話と創造の場」として機能している。私たちのプロセスでは、セコムオープンラボの議論で見つけた課題や生まれたアイデアを企業や団体に持ち帰って検討し、また必要に応じてセコムオープンラボに持ち寄って議論をする。この1・0と2・0の往復運動を繰り返すモデルが、私たちの考えているサービスビジネスにおけるオープンイノベーションだ。

セコムが2030年ビジョンに掲げる「あんしんプラットフォーム」の構築に向けては、オープンラボとして解決を図ることが一つの要。もう一つの要が「共想」をキーワードにしたオープンイノベーション。その入り口として多様な人々と未来の社会について対話し、共感を生む役割を担うのが、「セコムオープンラボ」だ。

セコムオープンラボの活動は、欧州で進むオープンイノベーション2・0のムーブメントに近い。1・0の場合は企業と企業や団体が1対1でニーズとニーズを掛け合わせる伝統的手法



来場者全員によるセコムオープンラボ共感アイデア投票会

沙魚川氏のプレゼンテーションでは、9月のセコムオープンラボに参加した12グループのアイデアからラボの中で選ばれた4アイデアが紹介された。テーマは「未来都市のくらしとまた見ぬANSHIN」。

本フォーラムの中で来場者全員による投票が行われ、4アイデアの中から「ギルド型まちづくり」が最優秀共感アイデアに選ばれた。同アイデアは、未来の都市がどこ

似通っていく中での「まちとしての独自性」と、職住分離が進む中での「特定のカルチャーに特化した住環境」をテーマとして、同じ趣味や価値観の人が集まって住むことで悩みや生きがいを共有し、専門店が集まることで消費も進むまちづくりを提案したものである。一つ一つのまちの独自性と、特化型のまちが日本中に増えることによる全体としての多様性とを両立させるというコンセプトだ。

パネルディスカッション

時間や空間にとらわれないサービスを生み出す「まちづくり」



原山氏



長谷部氏



杉本氏



齋藤氏

オープンイノベーションを積極的に推進中

長谷部氏

セキュリティなくしてネットワークなし

齋藤氏

長谷部氏は「2016年に「ちがいをちがいに変える街。渋谷区」を新スタートメントとし、政策の最上位概念である基本構想を20年ぶりに改定した。高層ビルなどハードは計画が決まっているが、ソフトをどうするかが課題だ。具体的には「渋谷区クリエイティブシティ特区プロジェクト」を打ち出し、次世代エンターテインメントを実現するための5Gネットワークの社会実験プロジェクトを計画している。壁面デジタルサイン、多言語翻訳機能を備えた拡張現実(AR)レストロン検索機、ARストリートファシジョンショーなどの設置を想定している。ソフト開発では「シブヤ・ソーシャル・アクセシブル・パートナー協定」により、オープンイノベーションを積極的に進めている。

長谷部氏は「渋谷区は2016年に「ちがいをちがいに変える街。渋谷区」を新スタートメントとし、政策の最上位概念である基本構想を20年ぶりに改定した。高層ビルなどハードは計画が決まっているが、ソフトをどうするかが課題だ。具体的には「渋谷区クリエイティブシティ特区プロジェクト」を打ち出し、次世代エンターテインメントを実現するための5Gネットワークの社会実験プロジェクトを計画している。壁面デジタルサイン、多言語翻訳機能を備えた拡張現実(AR)レストロン検索機、ARストリートファシジョンショーなどの設置を想定している。ソフト開発では「シブヤ・ソーシャル・アクセシブル・パートナー協定」により、オープンイノベーションを積極的に進めている。

ぬくもりが生まれるリアルな場があるべき

原山氏

まちづくりは社会全体で築き上げていくもの

杉本氏

まちづくりでもセキュリティを含めた全部をまとめて議論すべきだ。原山氏は、技術進化と社会との関わりをどう考えているか。

「セコムがイノベーションにかける「想い」について聞きたい。」

「セコムがイノベーションにかける「想い」について聞きたい。」

「セコムがイノベーションにかける「想い」について聞きたい。」

「セコムがイノベーションにかける「想い」について聞きたい。」

広告

企画・制作＝
日本経済新聞社クロスメディア営業局

信頼される安心を、社会へ。



セコム株式会社
http://www.secom.co.jp/